

平成28年 2月 2日

論文審査結果の要旨

専攻 入学年度	生物機能応用科学 専攻 平成23年度 (4月) 入学	氏名	田中文也
論文題目	タイ科魚類赤グループの帰属およびインド・西部太平洋におけるヘダイ属魚類の分類学的再検討		
審査委員 職名及び氏名	主査	教授	岩槻幸雄
	副査	教授	三浦知之
	副査	准教授	深見裕伸
	副査	准教授	廣瀬 遵
	副査	准教授	安田仁奈
審査結果の要旨 (800字以内)			
<p>沿岸性魚類の代表種であるタイ科魚類は、水産上重要な食用魚類や遊魚の種類を多く含む。しかし、最近の遺伝学的研究により、同属の種が異なるクレードに含まれ、それらは単系統でなく、多系統であることが大西洋や太平洋の魚類で示唆されており、種の帰属に問題のあるものが多く、また多くの種についても種の問題があるものが多いと指摘されてきた。そのためタイ科の世界的な全体像が不明で、モノグラムが未だに作成されていない状況である。</p> <p>そこで本研究では、特にタイ科の赤体色を持ち、種の帰属に問題のある、<i>Dentex</i> (12種)、<i>Cheimerius</i> (2種)、および<i>Pagellus</i> (6種)の3属において、内・外諸形質の詳細な比較検討により帰属の問題の再検討、また多くの隠蔽種が示唆されている銀白色の体色を持つインド・西部太平洋におけるヘダイ属魚類の分類学的再検討を行った。</p> <p>その結果、<i>Dentex</i> (タイプ種: <i>D. dentex</i>) 魚類全 12 種は、内・外部諸形態の詳細な比較検討により、属・亜属レベルで 4 タイプに識別することが示唆された。それぞれのタイプに <i>Dentex</i> (1 種)、<i>Opsodentex</i> (4 種)、<i>Taius</i> (4 種)、及び <i>Cheimerius</i> 1 亜属を含むキダイ属 <i>Dentex</i> (5 種) とすべきと判断した。また、ホシレンコは従来 <i>Cheimerius</i> に帰属されていたが、臼歯を持つことから <i>Cheimerius</i> とは別属で有り、本研究により新たに新属 <i>Amamiichthys</i> を提唱した。<i>Pagellus</i> は従来 6 種の有効種が知られていたが、2 属に分類でき、それぞれ <i>Pagellus</i> と <i>Nudipagellus</i> を適用すべきと判断した。</p> <p>体色が銀白色を持つヘダイ属魚類 <i>Rhabdosargus</i> は、これまで審査申請者の 1 新種を含む 6 種が有効種とされ、その内、ヘダイのみインド・西部太平洋に広く分布するとされてきた。しかし、本研究によりヘダイは各海域で形態的・遺伝的に種分化しており、南アフリカから紅海産のものは <i>R. sarba</i>、アラビア海産とインドネシアのカリマンタン島からは <i>R. niger</i>、インド南端やスリランカ産のものには <i>R. chrysargyra</i>、オーストラリア産は <i>R. tarwhine</i>、および東アジア産は <i>R. aries</i> の学名がそれぞれ有効で、学名の復活をすべきであると判断した。以上の研究成果は、赤いタイ科魚類の中で特に種の帰属に問題のあった属の帰属の問題を形態と遺伝情報から明確に整理したため、今後世界的な属の検索表の作成やタイ科の基礎的知見に貢献したものと判断される。</p> <p>また、インド・西部太平洋に分布するヘダイ属魚類のレビューでは、種の識別的特徴を明白にしたので、魚類学および水産学の基礎的知見におおいに貢献するものと思われる。更に、本研究において西部太平洋のタイ科魚類 2 属キダイ属 <i>Dentex</i> とヘダイ属 <i>Rhabdosargus</i> の歴史的な分散過程の経路にも新たな知見を提供しており、学位論文として十分価値あるものと判断した。公聴会での発表内容や質疑に対する応答も適切であり、本審査委員会は、論文の審査および最終試験に合格したものと判定する。</p>			

(注1) 論文題目が外国語の場合は日本語を併記すること。